

JSI Newsletter

発行：日本免疫学会（事務局 〒113-8622 東京都文京区本駒込5-16-9 財団法人 日本学会事務センター内）

編集：北村大介（東京理科大学生命科学研究科）／小安重夫（委員長・慶應義塾大学医学部）／高浜洋介（徳島大学ゲノム機能研究センター）／

徳久剛史（千葉大学大学院医学研究科）／西村孝司（北海道大学遺伝子病制御研究所）／山元 弘（大阪大学大学院薬学研究科）

2001年4月1日 Printed in Japan

特集 免疫理論の実践をめざす

日本免疫学会 会長就任にあたって

濱岡 利之 *Toshiyuki Hamaoka* 大阪大学大学院医学系研究科

わが国の免疫学の発展に寄与すべく結成され満30年を過ぎた日本免疫学会も、新しい時代の到来で、その果たすべき役割と責任は今までも増して重くなっています。皆様のお陰様をもちまして、学会組織はその後も順調に発展を続け、現在では総会員数が6,400有余名となり、この間、国内外からも高く評価され着実に世界をリードする立場に至っております。この度、本庶佑会長の後任として2001年から2002年の2年間に亘って日本免疫学会の会長をお引受けすることになり、文字どおりその責任の重さを痛感致しております。

免疫学研究は、生体防御システムの分子レベルでの理解から発展し、時間軸にそって一連にプログラムされた遺伝子群の発現制御機構からなる発生生物学領域をも巻き込んだ生命現象の理解へと、幅広くその研究動向を伸ばしつつあります。21世紀を迎え、広く生物学にはゲノム情報を中心とした爆発的に増大する情報をどのように整理、統合して生命現象の全体を見きわめるかという大きな課題があり、いわゆるポストゲノム時代にあつて、遺伝子・細胞群の生体内での精緻を極める機能の理解にとって免疫系は最もふさわしい生体システムであることは異論のないところでしょう。

また免疫学は、これまでの知見を元に、種々の難病の成因の解明や克服に向けての更なる飛躍も待たれているところです。わが国の免疫学研究は今まで各方面で世界が注目する成果を輩出しています。いよいよ新世紀を迎え、日本免疫学会も、常にチャレンジ精神をもって、新しい主題を先取りし、行動に移す努力を更に続けねばなりません。そして免疫学分野から他の生命科学、さらには臨床科学分野への情報発信が次々と行われるような活気とダイナミズムに満ち溢れた若々しい組織に継続的に脱皮をはかっていく努力も必要でしょう。すなわち最新の情報が日本免疫学会の活動を中心としていち早く提供され、世の中に広く正しく伝播されてこそ、良好な研究環境が約束され、若い後継者をひきつけ、順調に学会がさらに発展することになると思います。

日本免疫学会は学会員による学会員のための組織であり、学会員にとっては文字どおり生きた情報交換の場でもあります。学会員の正当にしてかつ建設的な意見をタイミングをはずすことなく謙虚に聞き、最新の研究成果の発表の場では実際に実験をしている人たちが大いに勇気づけられ、また明日に向けての更なる活力とアイデアが生まれるよう、学会を運営していかねばなりません。日本免疫学会の運営について若い会員の皆様方からの遠慮のないご意見とご提案を、理事、評議員、免疫学会事務局、Newsletterなどを通じて、どしどしお寄せいただきますことを期待しております。

なお、私の就任に伴い、日本免疫学会の運営の基幹をなす庶務担当幹事には徳久剛史教授（千葉大学）に、また、会担当幹事には平野俊夫教授（大阪大学）に引き続きお願いしました。学会運営の連続性を重視し、また実行力において卓越しておられるお二人に是非共ということでご留任をお願いしました。

どうか皆様方のご提言、ご指導およびご支援をお願い申し上げます。